

2025（令和7）年度 第2回 知床世界自然遺産地域

適正利用・エコツーリズムワーキンググループ

議事概要

日時：2026年3月10日（火）10：00～12：30

場所：斜里町 産業会館 2階大ホール（Web併用）

<議事>

- (1) 長期モニタリング計画に基づくモニタリングの実施状況
- (2) インタープリテーション全体計画の進捗について
- (3) 知床エコツーリズム戦略の見直しについて
- (4) 羅臼岳ヒグマ人身事故を踏まえた検証と対策の方向性について
- (5) その他

<出席者>

適正利用・エコツーリズム 委員

北海道大学大学院 農学研究院 教授	愛甲 哲也	
弘前大学 名誉教授	石川 幸男	
北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院 准教授	石黒 侑介	web
金沢星稜大学経済学部地域システム学科 講師	船木 大資	
株式会社知床ネイチャーオフィス 代表取締役	松田 光輝	
北海道立総合研究機構 エネルギー・環境・地質研究所 専門研究員	間野 勉	

以上、五十音順

科学委員会委員長

北海道大学 名誉教授	中村 太士	欠席
------------	-------	----

以上、設置要綱記載順

関係行政機関

斜里町 産業部 商工観光課 観光係長	岩淵 聖也	
同 総務部 環境課 自然環境係長	吉田 貴裕	
羅臼町 産業創生課 係長	白柳 正隆	web
同 産業創生課	佐藤 大誠	web

事務局

環境省 釧路自然環境事務所 所長	岡野 隆宏	
同 釧路自然環境事務所 国立公園企画官	渡邊 雄児	
同 釧路自然環境事務所 世界自然遺産専門官	鈴木 郁子	
同 釧路自然環境事務所 係員	新實 樹	
同 ウトロ自然保護官事務所 首席国立公園保護管理企画官	二神 紀彦	
同 ウトロ自然保護官事務所 国立公園利用企画官	伊藤 薫	
同 ウトロ自然保護官事務所 国立公園管理官	渡邊 寛明	web
同 羅臼自然保護官事務所 自然保護官	葉山 翔太	
林野庁 北海道森林管理局 計画保全部 計画課 課長	寺村 智	web
同 北海道森林管理局 計画保全部 自然遺産保全調整官	長崎 正明	web
同 北海道森林管理局 知床森林生態系保全センター 所長	川崎 文圭	
同 北海道森林管理局 知床森林生態系保全センター 生態系管理指導官	作田 明	
同 北海道森林管理局 知床森林生態系保全センター	田中 良	
同 北海道森林管理局 網走南部森林管理署 署長	山之内 弘幸	
同 北海道森林管理局 網走南部森林管理署 総括地域林政調整官	清水 亜広	
同 北海道森林管理局 根釧東部森林管理署 署長	鷹野 孝司	
同 北海道森林管理局 根釧東部森林管理署 野生鳥獣対策官	細谷 誠	
北海道 環境生活部 自然環境局 自然環境課 自然公園担当課長	島村 哲也	web
同 環境生活部 自然環境局 自然環境課 課長補佐	小峰 健一	web
同 環境生活部 自然環境局 自然環境課 主査(知床遺産)	黒田 芳人	web
同 環境生活部 自然環境局 自然環境課 主任	濱田 怜奈	web
同 環境生活部 自然環境局 野生動物対策課 ヒグマ対策室 主幹(計画推進)	橋本 和彦	web
同 環境生活部 自然環境局 野生動物対策課 ヒグマ対策室 主査(計画推進)	三好 和貴	web
同 環境生活部 自然環境局 野生動物対策課 ヒグマ対策室 主任	鈴木 輝	web
同 経済部 観光局 観光振興課 主幹(AT調整)	佐藤 雅代	web
同 経済部 観光局 観光振興課 主事	松原 巧実	web
同 オホーツク総合振興局 保健環境部 環境生活課 自然環境係長	小川 耕平	web
同 オホーツク総合振興局 保健環境部 環境生活課 主事	宮崎 祐伍	web
同 オホーツク総合振興局 保健環境部 環境生活課 主事	加藤 亮平	web
同 オホーツク総合振興局 保健環境部 環境生活課 知床分室 主幹	三井 義也	web
同 根室振興局 保健環境部 環境生活課 自然環境係長	河崎 淳	web
同 根室振興局 保健環境部 環境生活課 自然環境係 技師	西嶋 圭	web
国土交通省 北海道運輸局 釧路運輸支局	欠席	
同 北海道運輸局 北見運輸支局	欠席	

運営事務局

公益財団法人 知床財団	事務局長	玉置 創司	
同	調査研究室 主任研究員	秋葉 圭太	
同	事業部 保護管理事業係 係長	金川 晃大	
同	事業部 羅臼地区事業係 係長	坂部 皆子	
同	事業部 羅臼地区事業係 主任	谷 洸哉	
同	事業部 公園事業係	原口 桜子	
同	企画総務部 普及企画係	松田 隆聖	
同	企画総務部 普及企画係	佐々木 吾珠	

※1 議事概要の記述において、発言者の敬称・肩書などは省略しての記載とした。行政関係者の所属については、一部略称を使用した。

※2 文中、検討会議は適正利用・エコツーリズム検討会議の、WG はワーキンググループの、AP は河川工
作物アドバイザー会議の、ML はメーリングリストの、IP 全体計画はインタープリテーション全体
計画の、それぞれ略称として使用した。

＜議事概要＞

葉山：これより、2025年度第2回適正利用・エコツーリズムWGを開催する。開催にあたり、事務局を代表して環境省釧路自然環境事務所長の岡野より挨拶申し上げる。

岡野：環境省釧路自然環境事務所長の岡野である。本日は年度末の多忙な中、委員および関係機関の皆様に参加いただき感謝申し上げます。午後のエコツーリズム検討会議も含め長丁場となるが、よろしくお願ひしたい。今年度は世界自然遺産登録20周年を迎え、先日は札幌でこの20年を振り返るシンポジウムが開催された。地域連絡会議や科学委員会といった、いわゆる「知床方式」のこれまでの歩みを振り返る大変良い機会となった。登録当初の課題については着実に取り組みが進んでいる一方で、気候変動や地域全体の人口減少といった新たな課題についても議論がなされた。シンポジウムでは、20年という節目は伊勢神宮の式年遷宮のように、仕組みを含め改めて考え直す機会であるとの話もあった。現在エコツーリズム戦略の見直しに取り組んでいるが、この20年を振り返り、良いものは残し変えるべきところは新しく変えていく機会になると思っている。シンポジウムでも、提案制度は非常に素晴らしい仕組みであるが、現状十分に活用されていないとの指摘があった。本日はエコツーリズム戦略の見直しについても議論いただくが、改めて知床らしい体験とは何か、それを進めるための仕組みやあり方はどうあるべきか議論し、エコツーリズム戦略見直しへの助言をいただきたい。また、その他の議題では、羅臼岳のヒグマ人身事故を踏まえた検証と対策の方向性について扱う。これについては、関係機関で構成される知床ヒグマ対策連絡会議で議論を重ね、方向性を案として取りまとめている。これについても科学的知見に基づいた助言をお願いしたい。特に登山利用者に対し、ヒグマが生息する山岳地利用に関する情報提供や行動規範の周知、行動変容を促す注意喚起のあり方について助言を求める。さらに、その背景にある問題個体発生の原因となる来訪者の行動をどう変えるか、情報提供やルールの伝え方についても助言をいただきたい。その他の議題として、長期モニタリング計画に基づく調査結果や、IP全体計画の進捗についても報告する。限られた時間で多岐にわたる議論となるが、忌憚のない意見を賜りたい。

葉山：続いて、出席状況の確認を行う。本日、委員は全員出席しており、うち石黒委員はオンラインでの参加である。その他の関係機関の出席状況については、出席者名簿にて確認願ひたい。次に資料についてだが、資料1-1から資料5-2まで用意している。また、参考資料2点と、別冊の青色ファイルに計画類をまとめている。会議中、資料の不足等があれば適宜事務局までお知らせ願ひたい。以降の進行は愛甲座長に願ひする。

愛甲：本日は、適正利用・エコツーリズム WG から検討会議へと長丁場になるがよろしく
願います。冒頭、岡野所長からもあったように、本 WG における今日の大きな議
題はエコツーリズム戦略の見直しである。エコツーリズム検討会議との関係性につ
いては、前回 10 月のエコツーリズム WG および検討会議で議論した。改めて振り返
ると、エコツーリズム WG はあくまでエコツーリズム検討会議における地域の議論
に対し助言を行う立場である。また、長期モニタリング等を専門家の見地から検
証・評価し、地域で取り組むエコツーリズム検討会議に対して助言する立場で参画
することを改めて整理した。その観点から、エコツーリズム検討会議の議題の構成
や順番をこれまでから少し入れ替えている。簡単な考え方を先に説明すると、シン
ポジウムでも話題になったように、関係機関と地域が一体となって世界遺産を運営
する「知床方式」において、これまでの象徴的な取り組みがエコツーリズム戦略の
提案制度であった。しかし、最近は新たな提案がない状況が続いており、シンポジ
ウムでもその点を振り返った。地域の観光やエコツーリズムは地域の自律的な取り
組みが基本であり、そこに対してエコツーリズム WG としてどのような助言をして
いくかが非常に重要である。そのため、これまで検討会議の冒頭で行っていた提案
制度の進捗状況報告よりも、まず地域で何が行われているかを確認すべく、長期モ
ニタリング計画に基づく調査結果の共有を最初に行うこととした。エコツーリズム
WG では、報告内容について専門家の立場から意見を出し合い、議論したい。また、
日頃フィールドを見ながら感じたことなども共有してほしい。エコツーリズム検討
会議では、地域の構成団体の参加者それぞれに発言を求め、長期モニタリング調査
に表れていない点も含めて口頭で報告してもらう予定である。続いて、個別部会お
よび関係機関の取り組みの報告を受ける。さらに、羅臼岳でのヒグマ人身事故は非
常に重要な問題であり、地域の方々と対話する機会となるため、十分な時間を確保
すべく先に議題として取り上げる。エコツーリズム戦略の見直しについては、エコ
ツーリズム検討会議ではその次に扱うこととした。エコツーリズム戦略の見直しに
ついては、骨格を含め本 WG で多くの時間を割いて議論するが、エコツーリズム検
討会議では逆に方向性の承認を求める形とし、大きな内容の変更等については次回
以降の検討会議で議論してもらう認識である。エコツーリズム WG とエコツーリズ
ム検討会議の役割分担を意識した上で進行にご協力いただきたい。それではまず、
資料 1-1 から 1-4 について、長期モニタリング計画の実施状況の説明をお願いす
る。

(1) 長期モニタリング計画に基づくモニタリングの実施状況

資料 1-1 モニタリング項目 No19 「適正利用に向けた管理と取組」

資料 1-2 モニタリング項目 No20 「適正な利用・エコツーリズムの推進」

…知床財団・坂部が説明

資料 1-3 モニタリング項目 No21 「利用状況調査」

資料 1-4 オープンデータ化の取り組みの進捗について

…知床財団・秋葉が説明

愛甲：感謝する。説明のあった長期モニタリングについて、質問や意見があればお願いしたい。

松田：基礎的なデータを蓄積していくことは非常に重要であるが、評価する上で、実際に目標値はこれまで議論されたことがあるのか。例えば、このエリアでこれ以上利用者を増やすべきなのか、そうではないのかといった評価基準がないと、データを取得しても状況が好転しているのか悪化しているのかが判断できないと考えるがいかか。

愛甲：これまで目標値や基準が設定されたことはない。長期モニタリングの項目を整理した際、明確な基準とまではいかずとも、少なくともフィールドでどのような変化が起きているかを、事業者を含め実感として把握するために始めた調査が No. 20 である。この定性的な変化と、定量的なデータをリンクさせることで、現場で何が起きているかをより詳細に分析することを意図していたという経緯がある。

松田：収集したモニタリングデータを今後どのように活用していくかが重要な論点である。個人的な見解にはなるが、冬季の知床五湖ツアーについては、当初 5,000 人から 6,000 人規模の利用が見込めるアクティビティに成長するだろうと想定していた。その利用人数を前提として、必要となる管理費や参加者から徴収する負担金などの試算を行っていた経緯がある。現状の利用者数はまだその想定規模には達していないが、もし今後さらに利用を伸ばしていくべきだとするならば、今回のデータを踏まえ、エコツーリズム戦略の中で具体的にどのような施策を展開していくべきかといった議論に繋がられるのではないかと考えている。

愛甲：5,000 人から 6,000 人という想定は、何を根拠に算出されたものか。

松田：漠然としたものではあるが、一つは民間事業者が経営的に成り立つかどうかという指標である。もう一つは、冬季の他エリアの利用状況とのバランスを考慮した際、その程度の規模に持っていくことで、エコツアー全体の参加者が一定のボリュームになると考えたためである。ただし、当時から状況は大きく変化している。特に流水ウォークの利用者が、当初の想定以上に大きく伸びているという実態がある。そ

のため、流氷ウォークの利用人数が現状で適切と言えるのか、あるいはこのまま際限なく伸ばしてよいのかといった点についても、併せて検討していく必要があると感じている。

愛甲：流氷ウォークのデータは最近上がってきていないが、近年かなり増えているということか。

松田：10年前と比較すると、10倍以上になっていると思う。

愛甲：そう考えるとすごい変化である。

松田：現在は流氷が少なくなってきたこともあり、現場が芋洗い状態になる場合もある。適切な上限人数は不明だが、質を考慮した議論が今後は必要なのだろうと考えている。

愛甲：同意する。次に、石黒委員お願いする。

石黒：モニタリングの目的に関わるが、例えば、手間がかかる等という理由で事業者の協力が得られず、流氷ウォークのように現在最も注視すべき活動のデータが集まらないのだとすれば、それは制度上の大きな課題として認識すべきである。協力が得られないことが問題なのか、協力しづらい制度設計になっているのかは議論すべきである。また、技術的な問題や施設の更新等で既存のデータが取得できなくなった件についても、マネジメントにおけるモニタリングの重要性を鑑みれば、「過去のデータはもう不要である」と安易に判断すべきではない。現場がデータを取得できない・取りづらいという現状で終わらせず、制度上の対応を検討していくべきである。以前、秋葉氏とも知床観光の全体像をどのように定量的に把握するかについて議論したが、難しかったという経緯がある。技術革新を取り入れながら、いかに地道にデータを取得できる体制を構築していくかという方向性を議論しておかなければ、古い仕組みが抜け落ち、場当たりの新しい仕組みを継ぎ接ぎするだけの状態に陥ってしまうのではないかと強く懸念している。

愛甲：技術的な問題について補足すると、現在無人のトラフィックカウンターは国内の旧機種が更新できない移行期にあり、安価な代替機がないため各国立公園で苦勞している実情がある。入林簿や登山届については、ヒグマ対策の一環としてチェックリストで代替する方法や、YAMAP等の登山記録アプリを活用するなど、新たな手法を検討すべき時期にきている。また、松田委員の指摘に関連して、長期モニタリング

結果の中間評価を行う必要がある。目標値の決定までは至らなくとも、現状の利用状況をどう評価するかについては、中間評価の際に議論すべきだと改めて感じた。次に間野委員、お願いしたい。

間野：資料 1-3 のカラー地図は、今後の方向性を見出す上で非常に有用である。先ほどの松田委員からの「厳冬期の知床五湖ツアーは現状 3,800 人であり、想定である 5,000~6,000 人に照らせばまだキャパシティに余裕がある。」というコメントにもあったように、こうしたモニタリング結果を地元の観光業者等に提示し、受け入れに余裕のあるエリアや過密による弊害が生じているエリア、利用の分散化の必要性などを共有することが重要である。その上で、現場が望ましいと考えるあり方を率直に汲み取り、それを実現するための具体策を議論する材料として活用すべきである。具体的には、形骸化が指摘されている提案制度の改善、新たなツアーの造成、課題解決のための施設整備などの検討に役立てることができると考える。「データが現場の課題解決や改善に使える」ということが観光事業者等に理解されれば、現在課題となっているモニタリング調査への協力不足の解消にもつながり、より積極的にポジティブな協力が得られるはずである。今後のエコツーリズム戦略や提案制度において、モニタリングデータを積極的に活用していくという発想の転換を図るとともに、データが持つ価値を再認識することが重要である。

愛甲：まさにそうしたデータに基づく変化の議論が、検討会議で行われることを期待している。

秋葉：長期モニタリング計画の経緯も含め補足する。別冊資料⑤第 2 期長期モニタリング計画の 11 ページ目をご覧ください。このデータを用いた評価の観点は、観光利用等の環境圧力が遺産の価値に影響を与えているかを確認することであり、評価の基準は記載の通りである。人為的な環境への影響、またはその予兆を、このデータから読み取れることがこの調査に求められていることである。No. 19、20、21 という 3 つのモニタリング項目で利用者の動向を調査しているが、利用者数が多いだけで環境悪化に直結するわけではないという議論があり、管理やルール、施設整備次第で多数の利用者があっても影響を抑えることができるはずである。そのため、管理の努力も含めて判断する必要があるため No. 19 で管理状況を確認していただく。利用者数は前提となるものであり、モニタリングの評価の表で直接評価するものではなく、参考データとして扱っている。具体的に利用による環境影響を評価する際、温暖化やシカの影響等から切り分けるのは困難なため、他の WG のモニタリング項目と、こちらの No. 20 の聞き取り調査の結果を照らし合わせ、変化の予兆や利用による影響を把握し、評価する。ただしこれらはかなり定性的であるため、こ

れらを総合的にエコツーリズム WG の専門家に評価してもらうという枠組みになっている。

愛甲：補足により、評価を前提としてこの調査によるデータが存在することが明確になった。資料 1-3 の概要図は非常に重要であり、このデータから様々な変化が読み取れる。細かい点だが、各登山口の利用者数については、昨年 8 月 14 日以降は登山口が閉鎖されているため、表にその旨を明記し、8 月 14 日までの人数として例年と比較・評価する必要があるだろう。船木委員、お願いしたい。

船木：調査結果を示していただき感謝する。3 点意見がある。1 点目は、No. 19 の「適正利用に向けた管理・取組状況調査の実施結果」と、No. 20 の「適正な利用・エコツーリズムの推進の実施結果」についてである。手法の違いは理解できるが、言葉だけでは項目の違いが分かりにくいいため、より明確にすべきである。2 点目は、No. 19 についてである。現在は実施された様々な活動、あるいは計画の策定等が列挙されているが、実施した事実だけでなく、具体的にどのように実施したかや、それが内実どうであったのかが非常に重要である。また、何が実施されなかったのかという観点も必要である。例えば、資料 1-1(2)の「守るべきルールの設定と指導」についても、実施した活動だけでなく、「やるべきだが実施できなかったこと」も記載することで、モニタリングとして充実するのではないか。3 点目は、長期モニタリング計画の評価の枠組みについてである。モニタリング結果の細かい項目を見ていくと、必ずしも観光がインパクトとしてのみ受け止められているわけではないと理解できるが、その中で、上位項目である評価の観点や評価の対象の部分で、観光が主に「観光圧力」という自然環境へのネガティブなインパクトとしてのみ書かれている点に疑問がある。先ほど松田委員からもあったように、エコツーリズム戦略が目指す観光の質の向上や、地域社会・自然環境への還元といった観光のポジティブな側面も、評価対象の上位項目として明記し、評価することが非常に重要ではないか。

愛甲：感謝する。1 点目の名称について説明すると、No. 19 は主に関係機関の取り組みを知床白書から拾い上げたものであり、No. 20 は地域の取り組みや関係機関への聞き取りをまとめたものである。そのため、No. 19 では「実施できなかったこと」が拾えていないが、No. 20 と対応させることで状況が見えてくる作りになっている。No. 20 で誰の発言かを明確にすればより関係性が分かりやすくなるだろう。「観光圧力」については、長期モニタリングの項目設定や評価の視点は、知床世界遺産管理計画の記載に基づくものと認識しているが、知床世界遺産管理計画の記載はどうなっているか。

船木：知床世界遺産管理計画の基本方針の管理目標には、「遺産地域の管理にあたっては、多様な野生生物を含む原生的な自然環境を後世に引き継いでいくこと」が掲げられている。また、管理にあたって必要な視点として「レクリエーション利用と自然環境の保全の両立」が明記されており、自然環境の保全のみならず、適正な利用との両立を図る方針が示されている。「原生的な自然環境を後世に引き継ぐ」ことの具体的な意味については様々な議論があるが、質の高い観光体験を通じて知床の自然の価値を広く理解してもらうことや、ツアーなどの観光から生じる便益を自然環境や地域社会へ還元していくという観点において、観光は非常に重要なツールである。したがって、観光が果たすポジティブな役割についてもモニタリング項目に位置づけ、適切に評価していくべきであると考えている。

愛甲：非常に重要な観点である。ぜひその方向へ進めたい一方で、長期モニタリング計画自体は中間評価のタイミングでどの程度修正できるかが課題となる。この点については中間評価の場で議論したい。続いて、インタープリテーション全体計画の進捗について説明をお願いします。

(2) インタープリテーション全体計画の進捗について

資料 2-1 知床 IP 全体計画とストーリーの案

…環境省・伊藤が説明

資料 2-2 知床 IP 全体計画の今後の予定と利活用

…知床財団・秋葉が説明

愛甲：IP 全体計画について、質問や意見があればお願いしたい。船木委員、お願いします。

船木：資料 2-1 の構成案について、地域住民への配布を想定した場合、計画編まで盛り込んだ全 88 ページという現在の分量では分厚くなりそうで、手元に置いて日常的に活用してもらうにはハードルが高くなると懸念される。そのため、例えば「ストーリーブック」の本体と、「インタープリテーション全体計画」の計画編を切り離して作成するといった選択肢も必ずではないが検討すべきではないかと考える。これが 1 点目である。2 点目は、資料 2-2 についてである。これは以前から気になり質問していたことだが、知床の価値を明文化して地域へ配布するにとどまらず、その価値に基づいた具体的な観光機会の創出をどのようにサポートしていくかが非常に重要である。この実践に向けたサポート体制についても、計画の中でしっかりと位置づけていく必要がある。3 点目は細かい話になるが、資料 2-1 の別紙の「はじめ

に」についてである。まだ完成ではないと思うが、文章に若干違和感を持った。策定プロセスとして、地域の人々に実際に知床の価値を持ち寄ってもらい、ボトムアップ的に作られたと認識しているが、「はじめに」を見るとそのことがあまり書かれておらず、どちらかというと環境省が知床の価値を教科書として全戸配布し、住民に一方的に理解を求めるといった印象を受けた。もう少しボトムアップで作成した経緯を記載した方が良いのではないかと。

愛甲：これについてはどちらが回答するか。

伊藤：実際のワークショップの際も、参加者から「なぜ環境省がこのような観光目線のことを行うのか」という疑問の声があった。その点についても説明を含めた文章作成に留意している。また、指摘のあった「ワークショップを含め、地域と作り上げた」という点についても、全体の中でうまく説明できるよう、これから組み込んでいきたい。秋葉氏から補足があればお願いしたい。

秋葉：補足する。ストーリーブックの中に計画要素をどの程度入れるかについては内部でも議論があり、あまり細かな行政計画的なものをここに入れる意図はなく、記載されている部分もかなり簡略的で概念的なものである。一方で、受け取る側に知床の現在の管理体制やルール、管理計画の存在を伝える必要はあると考えている。先ほどの質問とも関連するが、現在エコツーリズム戦略の見直しが進む中で、このIP全体計画の計画要素は戦略と統合、一体化していくイメージである。したがって、IP全体計画の要素については戦略の見直しの中でどう伝え、実行していくかという議論がなされるだろう。また、ボトムアップで進めてきたという手法は重要である。第4部の4-3に作成プロセスやワークショップの記載があるが、これがどのようにできたのかを書き込むことが重要だという議論が内部でもあった。記載場所はともかく、この内容がどのようなプロセスで、どのような方々が参加して作られたかについては、監修者からも明記すべきとの意見を強くいただいております、意識して盛り込む予定である。

船木：感謝する。具体的なイメージが湧いた。

愛甲：他に意見はないか。間野委員、お願いする。

間野：先ほど全戸配布という話があった。それは地域の住民一人ひとりにあまねく知ってもらい、包み隠さず読んでもらうことで、今後の知床をどう活性化していくか考えるための資料にしてほしいという期待を込めて配布するのだと思う。しかし、受け

取る側からすると「また役所が分厚い字だらけのものを配ってきた」と否定的に受け止める人が多数いるのも事実である。読んでもらう際に、この IP 全体計画を誰が発行したのかを真っ先に見る気がする。その際、予算確保や主導権の都合で「環境省」と大きく出ていると、「またお上り」と捉えられてしまい、非常にもったいない。前置きが長くなったが、これが誰によって作られ、どのような形で印刷されて世に出るのか、完成品のイメージについて伺いたい。

伊藤：ご意見感謝する。本日全体像を見せられず申し訳ないが、資料 2-1 の最後の第 4 部、4-4 の制作体制や今後の予定のところ、環境省主導ではあるものの、地域と協力している経緯などをうまく説明できるよう努めたい。また、地元の観光事業者から出向している自身の立場から申し上げると、地域観光事業者において IP 全体計画の必要性については、すでに関係機関の間で共通認識が形成されつつある。今後はこれを一歩進め、これまで十分な連携が図れていなかった漁業や農業といった隣接する他産業ともうまく連携を深めていきたいと考えている。そのため、他業種との連携推進に関する具体的な知見やアドバイスがあれば、ぜひ引き続きご教示いただきたい。

間野：そうすると、例えば表紙等の発行元には、環境省が刊行したという形で印刷せざるを得ない、そう見せざるを得ないということか。

伊藤：その通りである。

愛甲：船木委員のコメントにもあったように、ワークショップを通じてボトムアップで作成したという経緯を、冒頭の第 1 部にも記載するような工夫が必要だと思う。この IP 全体計画がどのように作られたかという説明は、記載した方が良い。

岡野：私から答えてしまうが、そのようにしたいと考えている。ボトムアップで作成したことや、「自分の発言がここに使われている」といった地域の方々の手触り感は非常に重要である。記載の順番を入れ替えて前に持ってくる、ワークショップの様子の写真を入れる、参加者の生の声を載せるなど、地域との関わりが見えるような形にできればと思う。

愛甲：他に意見はないだろうか。

石川：今のお話に関連するが、これまでの IP 全体計画の進捗の中で、我々 WG 委員に対しては「町民向けにワークショップを複数回開催し、意見を集めている」といったプ

ロセスの資料が何度か共有されている。ああいった資料こそが、このプランが出来上がるまでの経過を如実に表していると思う。我々は経過を把握しているため経緯を理解できるが、完成品だけを渡された町民は、先ほどの懸念にもあったように「また環境省が何かを作った」と受け止めかねない。そのため、長い時間をかけて意見を集めた経緯が最初に分かるように提示しておくべきである。先ほど意見があったように、住民の発言が反映されていることを示したり、インパクトのある言葉を盛り込んだりする工夫があれば、住民にも分かりやすく受け止めてもらえるのではないかと。ぜひそのような構成にしていきたい。

愛甲：今のコメントは助言として受け止める。

山本：知床財団の山本である。これまでの意見を総合すると、「はじめに」の部分にボトムアップで作成した旨の文章を追記した方が良いと受け止めた。また、第4部に、昨年3つのエリアで3回ずつワークショップを実施し、そこから出た言葉を拾い上げている旨を構成として入れているが、その順番を入れ替えて前半に入れ替えることも含め、環境省と調整したい。さらに、今年実施したワークショップの中で、参加した地域の人々からの写真提供が数多くあった。それらはブックに多数盛り込んでおり、提供者の名前もクレジットとして入れる予定である。先ほどの間野委員の指摘にあったように、堅苦しいものにならないよう、地域の人々が少しでも関わって完成したことが伝わる形で仕上げたいと考えている。

船木：内容だけでなく、手に取ってもらうための形態や素材も重要だと考えている。半分冗談であるが、飛び出す絵本のような形式であれば子どもにも親しみやすいのではないかと。飛び出す絵本は例えだが、内容を工夫して手に取ってもらうことも重要であり、予算の制約もある中であるが、形態にもこだわることでより手に取ってもらいやすくなるのではないかと。ガイドが直接観光客に見せるような使い方も考えられるため、形態へのこだわりも一つの案としてお伝えする。

愛甲：冗談ということであるが、手に取りやすさは私自身も非常に重要だと考えている。先日富士山麓のストーリーブックを見せてもらったところ、A5判で作成されていた。A4判は書類のような印象を与えるが、A5判程度であれば手に取りやすい印象であった。また、先ほど山本氏からあったように、写真提供者の名前を入れれば、「自分の写真が載っている」「家族の写真が載っている」という理由で見てもらえるきっかけにもなる。非常に良いアイデアだと思うので、そのあたりは色々工夫をしていただきたい。間野委員、お願いします。

間野：繰り返しになり恐縮だが、IP 全体計画の成果物は冊子媒体がメインになると認識している。しかし、単なる PDF 化にとどまらず、必ず WEB 上で検索・閲覧ができる仕組みを併せて構築していただきたい。例えば、冊子が手元になくとも、スマートフォンやタブレット等から即座にストーリーブックを呼び出し、「このようなものがある」と手軽に人に見せられるようにすることが、計画の普及において圧倒的な効果を発揮すると考える。スマートフォン等の限られた画面サイズで重要な部分を的確に伝えるためには、冊子とは全く異なる見せ方や工夫が必要になるはずである。技術的なハードルや制作の負担はあるかもしれないが、より多くの人に IP 全体計画を知り、活用してもらうためにも、ぜひ今の早い段階から WEB での効果的な展開を念頭に置いて制作を進めていただきたい。

愛甲：今の指摘の通り、単なる PDF 化にとどまらず、WEB 上で検索や閲覧がしやすい形へどのように工夫できるか、実用性を高める方向で引き続き検討をお願いしたい。では、次の議題に移る。知床エコツーリズム戦略の見直しについて、資料 3-1 から 3-3 まで説明をお願いします。

(3) 知床エコツーリズム戦略の見直しについて

資料 3-1 エコツーリズム戦略見直しの方針と構成案

資料 3-2 エコツーリズム戦略に盛り込むゾーニングについて

資料 3-3 既存の計画・ルールの整理について

…環境省・葉山が説明

愛甲：大きくは、全体的な構成の変更やゾーニングの扱い、既存のルールの整理についてである。ゾーニングについては、地域で作成した「ゾーニングとイメージ (案)」をエコツーリズム戦略にどのように取り込むかが重要である。以上について質問や意見などをお願いします。はじめに私から 3 点質問をしたい。1 点目として、先ほど説明のあったゾーニングに関する点で伺いたい。地域で作った「ゾーニングとイメージ (案)」が作成当時から現状と乖離し始めている点と、また特定の利用形態や利用者数を前提とした区分が新たな提案の可能性を狭めているという課題について、具体的にどのような状況を指すのか伺いたい。2 点目として、今後のスケジュールに関しても、IP 全体計画で整理された価値に基づきゾーニングとの関係を整理する作業が、次回の検討会議 (9 月または 10 月) まで持ち越されるのは時間が経過しすぎる。事務局への逆提案となるが、検討会議開催前に作成した素案についてエコツーリズム WG で検討を行うべきである。3 点目として先ほどの議論を踏まえ、IP 全体計画 (ストーリーブック) がいつ頃完成する予定なのか、改めて確認したい。

葉山：IP 全体計画は、今年度中に完成する予定である。

愛甲：IP 全体計画の完成を受け、エコツーリズム戦略のゾーニングを整理するということか。イメージとしては、資料 2-1 のストーリーブック（案）に示された価値づけと、その価値を伝えられるアクティビティの場所を結びつけて整理していくという理解で良いか。

葉山：その通りである。ストーリーから拾える価値を感じ、伝えられる場所がどこであるかを整理していくイメージである。

愛甲：1 点目の回答もお願いします。

葉山：参考資料 2 に、過去に地域で議論された「ゾーニングとイメージ（案）」を配布している。例えばルシャ地区については「サケの遡上とヒグマの捕食による陸と海の繋がりを学ぶ」とあるが、実際にはカラフトマスの遡上が減少し、観光船を含めヒグマがなかなか見られない実情がある。また、現実的なアクセスについても既存のルール等の課題がある。その他、知西別岳とその周辺地域については、バックカントリー利用が記載されているが、冬季は道路が閉鎖されておりアクセスの問題がある上、公園計画でも利用施設の整備等は想定されていない。こうした既存の計画との兼ね合いも含め、改めて整理が必要だと感じている。

愛甲：現状では利用が行われていない場所も含めて、「ゾーニングとイメージ（案）」には示されているため、それをエコツーリズム戦略にどのように明記できるのか、計画や土地管理者のことも含め整理するという理解で良いか。

葉山：その通りである。

愛甲：石川委員お願いします。

石川：現在、エコツーリズム戦略の見直しを行っているが、見直しの具体的な文案というのはまだ出されていないということによろしいか。

葉山：その通りである。

石川：いつも地面を這いつくばって、植物を見ている立場からの発言となる。エコツーリズム戦略で行っているモニタリングは、先ほど議論のあった長期モニタリングの項目では、具体的に植生への影響や、登山者の増減といったモニタリングであると受け取れる。それは、エコツーリズム戦略に記載されている9ページの(8)モニタリングという項目があり、「関係行政機関や観光利用を推進する者は観光客による踏み荒らし等の自然環境への影響、観光客の満足度や感想、観光客のニーズや行動の変化等をモニタリングする。」と非常にシンプルな書きぶりになっている。個人的にはそうは思わないが、これまでの提案制度の中では、実際に担当された地域の方たちがモニタリングまで負担するのは厳しいという意見もあった。細かい書き込みはともかく、どういう考え方でモニタリングを行うのかをエコツーリズム戦略に書き込むべきである。そして、その見直しの文案はいつ頃整理されるのか問いたい。

葉山：参考資料1のエコツーリズム戦略見直しに係るロードマップの通り実施予定である。ゾーニングの検討も含め、文案を出さなければ今後の議論が難しい段階に入っているため、次回のエコツーリズムWGおよび検討会議までに骨格を作りたいと考えている。4月から7月の事務局作業で、エコツーリズム戦略に書き込むべき課題や戦略の素案、ゾーニングを含めて作成を進めていく予定である。

石川：理解した。モニタリングに関しては、これまでの検討会議の中でも、科学委員会委員のような自然環境を重視する立場と現地で事業を営む事業者との間で意見や理解の相違があった。完全に詰めるのは困難かもしれないが、今後うまく調整が取れるような内容や方向性を検討していただきたい。

葉山：会議の回数も限られているため、メールベースで随時相談をさせていただければと思う。

愛甲：次に船木委員、お願いします。

船木：スケジュールの確認を行っていただいたが、エコツーリズム戦略の素案に私達委員がどのように関わるのか、どのタイミングでエコツーリズムWG前に委員に意見を聞くのかを教えてほしい。

葉山：具体的な素案の作成を4月から7月の間で進めていきたいと考えているが、可能であればその間に一回WG委員と意見交換をする場を設けたい。具体的な項目ごとの

中身について議論をしていただくのは、8月頃のエコツーリズムWGで行うイメージである。

船木：エコツーリズムWG前の意見交換は、進捗報告というイメージか。

葉山：事務局が作成した素案に対して、どういった要素が足りないか等レビューいただければと思っている。

船木：説明、感謝する。今回事前に送付された資料をもとに、「エコツーリズム戦略における目標・方針・方策」の整理・分析を行った。時間もなく、私の主観的などころもあることを踏まえた前提で聞いていただきたい。

エコツーリズム戦略で掲げている目標と、その目標をどのように達成していくのかという方針、そして具体的な方策が対応関係にあることが計画として非常に重要である。この考えのもと、現状のエコツーリズム戦略における目標、方針、方策について表に整理しその傾向を確認した。結論から言うと、「遺産地域の自然環境の保全とその価値の向上」や「世界の観光客に対する知床らしい良質な自然体験の提供」については、実際に実施されているかは別として、対応する方策が書き込まれている。一方で、「持続可能な地域社会と経済の構築」については、方策の提示が手薄であると感じた。先日の札幌で開催された世界自然遺産20周年シンポジウムでも人口・労働者の減少の課題が提起されていたことが印象に残った。そしてこのエコツーリズム戦略においても、持続可能な社会を作るための具体的な方策が弱く感じた。今回のエコツーリズム戦略改定では、この点についてどのような方策で実現していくかを考える必要があると思った。また、方策として今回新たに「リスクマネジメント」が追加されたが、これにストレートに合致する目標や方針が見当たらない。整合性を取るなら、目標や方針レベルにリスクマネジメントに対応する安全管理等を書き込んだ方が、計画として論理的になる。以上の視点で改定を進めることが重要である。

葉山：まさにエコツーリズム戦略が作られた時は、知床エコツーリズム推進計画にあるような、地域の方が考える目標や方針と、それに対して皆さんが実施可能な方策が書き込まれたという背景がある。しかしその後利用状況が変化してきている中で、新たな目標やそれに対する方策を書き込むことが必要であると思う。ぜひ、船木委員の分析を参考にさせていただきたい。

船木：この方策と長期モニタリングが結びついており問題はないかと思うが、この方策をもとに、実際に実施されたのか、現在の目標は実現に向かっているのか、評価シフ

ィードバックしていくということが非常に重要であると思っているので、よろしく
願います。

愛甲：「持続可能な地域社会と経済の構築」という部分について、具体的な方策とどう結
びつけるか。方策が手薄になっているということだが、エコツーリズム戦略の中の
方策だけで足りるのかという問題もあると思っている。エコツーリズム戦略の中で
行うことが、それに結びつくこともあるが、船木委員の分析を見ると、方策を増や
さなければならぬと思う一方で、これはエコツーリズム戦略の枠内だけで完結す
る話ではなく、斜里町・羅臼町の観光施策や総合政策などとも関連する話である。
自治体の計画等との関連性も整理する必要があるのではないか。

船木：具体的にどうすれば実現できるかというアイデアがすぐにあるわけではないが、現
状の方策だけで持続可能な地域社会を実現するのは難しい。そのため、これに対応
する方策を考えてエコツーリズム戦略に盛り込むべきだという認識をまず共有し、
この場で皆様の知恵を結集して前向きな議論をしていくのが望ましいと考えてい
る。

愛甲：今の点について、皆様の意見をいただきたい。

石黒：私も同感である。両町との施策の整合性を考えると、エコツーリズム戦略に書き込
むスコープをどこかで明確に規定しなければならない。リスクマネジメント一つと
っても、方針の文言修正で済むものもあれば、より広範な議論が必要なものもあ
る。また、全体的に事業者との関係性の規定が曖昧に感じるため、その辺りも改め
て検討する必要がある。

松田：船木委員の意見に関連するが、戦略を実行していくためには、民間事業者の視点で
言えば戦術の議論が必要不可欠である。戦術まで落とし込まないと、民間事業者は
自分たちが何をすべきか何ができるかイメージできない。これまでの机上の議論だ
けでなく、民間事業者に理解して行動してもらうためには、イメージが見える化し
ていく必要がある。

愛甲：過去にエコツーリズム推進実施計画の実施計画やエコツーリズムガイドラインが作
られているが、実施計画というのは戦術にあたるものか。

松田：実施計画はそれに当たるものだったが、誰が実行するかなどの議論が十分に煮詰ま
っていなかったと思うが、記憶が曖昧である。資料 3-3 に計画統合の話がある

が、当時の実施計画はモデル事業で3か年計画として作成されたものであった。それ以降は実施計画と言えるまでの具体的な戦術は書き込めていない。エコツーリズムガイドラインについても現在は形骸化しているため、検討会議の中で見直す話しになっていると理解しており、この作業は必要である。また、現在の活動しているガイド事業者は実施計画もエコツーリズムガイドラインも記憶していないと思う。作成以降に来たガイドに関しても存在すらほとんど知らないのが実情である。

愛甲：この部分をどのように統合するのか、簡単に記載されているが作業的には難しいと思われる。

葉山：戦術の部分については、その具体的方策として行政が今後実施する内容を、戦略に書き込むことを想定としている。一方で、地域住民を含む民間事業者がどのように取り組むかという点については、基本的には提案制度に該当するものと考えている。

愛甲：しかし、提案がないと戦術がないという状態は困るため、提案がなくても民間事業者に担ってもらうべき事柄については、戦術としてどう記載するかを検討する必要がある。提案制度自体については、先ほどのモニタリングでの議論のように提案者だけが全てを背負うことのないよう、エコツーリズム戦略策定後の要綱修正を通じて、制度は残しつつもより提案しやすい形へ見直していく考えである。一方で、松田委員が指摘したような全員で取り組むべき基本的な戦術については、もう少し具体的に記載した方がよいと考えている。過去のエコツーリズム推進実施計画等も参照しながら統合の仕方を整理し、先ほど船木委員が整理・分析したマトリックスに当てはめた際に逆に何が不足しているのかを整理しなければならないと感じている。岡野氏、これについて何か意見はあるか。

岡野：戦術を作成する上で悩ましいのは、行政が進められる部分とそうでない部分。全員で守るべきルールづくりや現在取り組んでいるような制度の構築などは行政で戦術として定めていくことができる。一方で、民間事業者自身の事業については、やはり提案制度を活用して実現していく形になると考えている。戦術として取り組むべき要素が複数あるため、まずはこれらをしっかりと整理して進めていく必要があると考えている。

戦術を検討するにあたっての質問だが、現在の「検討会議」という場合は、そのままが良いのだろうか。先ほど話があったように、ガイドの顔ぶれも変化し、新しい方が入ってきている中で、そうした状況に合わせた場を作らないと、結局は戦術が実

を結ばないのではないかと感じている。この点について、皆様はいかがお考えだろうか。

松田：私も別の場が必要であると考え。このエコツーリズム WG や検討会議はあくまで方向性を決める場であり、戦術的な内容はまた別の場で議論すべきである。そして、その戦術をそのまま実行して良いかについては、再度このような検討会議に諮り、アドバイスをもらう形が望ましい。会議の数が増える懸念はあるかもしれないが、全員が全ての会議に出席する必要はない。行政側は多くの会議に出る必要があるかもしれないが、内部で役割分担を行い、出席する会議を取捨選択していかなければ、単に会議が増えるだけになってしまう。しかし、実際に現場を巻き込んで動かしていくためには、現場の人々が意見を出し、議論する場がなければ、このエコツーリズム戦略も浸透していかない。先ほどのストーリーブックにしても、最初は読まれても次第に忘れ去られ、形骸化してしまう恐れがある。非常に重要なものを作成しているからこそ、形骸化しないよう、現場を巻き込む継続的な仕組みが必要である。

愛甲：現場の人が意見を言う場というのは、結局のところ部会であると思う。現在、部会は場所や策定したルールごとに設けられており、全体を横断するような部会は存在していない。また、エコツーリズム戦略の下に部会があり、部会ごとにルールの有無が異なり、ルールを策定して解散した部会もある。逆に、個別の課題に対して、それぞれの協議会などがルールを作り運用しているところもある。そうした既存の場では、恐らく日常的に現場の方々が様々な議論を行っていると思われる。これらは随時参照としていたり、知床五湖の協議会については連携となっているが、こうした各組織・会議体との関係性を整理する必要があるのではないかと。そして、まさにそうした戦術を話し合う場は、部会なのではないかと考えるが、いかがか。

松田：部会が機能するのであれば、そこが適任であると考え。しかし、部会を設けるレベルにまで至らない課題もあるのではないかと。別の会議を立ち上げるとなると、単純に会議数が増加してしまう懸念はある。実際に現場を見ても、知床五湖に関してだけでも「利用のあり方協議会」や「審査部会」、さらにそれを動かすための会議など、多くの会議がある。これらの会議は主に行政を含めた場であるが、私たち現場としては、別途ガイドを集めて意見を聞く機会も設けている。しかし、そうした場も正式な手続きを踏まなければ、意見の集約やきちんとした議論ができないのも確かである。決して、闇雲に会議を増やしたいと主張しているわけではない。

愛甲：私の意図は、決して会議を増やすことではない。現在すでに行われている部会や協議会での会議などを、全てこのエコツーリズム戦略の中に位置付けてはどうかという提案である。つまり、そうした既存の場を、戦術を話し合う場として公式に位置付けるような整理ができないかと考えている。船木委員は、いかがか。

船木：直接のことではないが、新しく1つのトピックのみの議論の場を設ければ、進め方次第では参加者の負担は減らせると考えている。実際に着手してみないと分からない部分はあるが、関係者が集まってゼロから戦術を話し合うのではなく、まずは既存の資料を分析することで、具体的な戦術はある程度整理できるのではないか。その整理された内容を現場の方々に議論していただく形をとれば、ゼロから議論するよりも現場の負担は少なくなるはずである。そのような進め方も一つの案として考えられる。

愛甲：既存のものについて話をすると、どういったイメージか。

船木：実施主体が誰かという話しはあるが、エコツーリズムガイドラインのようなものが戦術レベルに該当するのであれば、まずはそうした既出の資料をベースに戦術としては概ねこの範囲に収まるという全体像を整理し、その上で委員の皆様にも過不足をチェックしていただくという発想である。また、エコツーリズムガイドラインについて挙げたが、知床五湖やカムイワッカなど、現在バラバラに存在している各部会においても、具体的に戦術レベルまでの議論が行われていると考えられる。そこで、一旦仮に私が各部会で検討されている戦術をピックアップし、知床五湖やカムイワッカといった個別のトピックだけでなく、共通する戦術を一本化する。その作業を経た上で皆様にも確認していただくという進め方である。実際の資料を精査していないため確言はできないが、一つの発想としてよいと思う。

愛甲：この後の検討会議でも報告があるが、例えばカムイワッカの部会では、アクセスコントロールやシャトルバスの運用と、カムイワッカ湯の滝の事業の課題提起があると聞いている。現在の各部会はどうしても特定の場所とそこに設定されたルールに紐づいているため、交通コントロールや全体の入り込み数といった、部会をまたぐような戦術について議論する場が存在しない。かといって、現在の検討会議では議論が多すぎて詳細な議論になりにくい。松田委員のイメージや先ほどの船木委員の話しにも通じるものである。そこで、検討会議での議論が難しいのであれば、人数を絞った検討会議の下部会のような場を新設してはどうかと考えている。エコツーリズムWG委員や構成団体の代表などが集まり、将来のテーマや横串を刺すべき課

題について話し合う機会を、検討会議の前に年1回でも設けるのは有効ではないだろうか。

間野：話を聞いていて考えたのは、これまで先送りになってきた未解決の課題への対応である。例えば、現在のカムイワッカの問題、クマの問題、アクセスコントロールの問題などは、まさに共通の課題である。会議を増やしすぎないという観点から、部会開催のタイミングを調整し、合同で開催してみてもいかがだろうか。事務局や運営の負担、出席者の時間および作業的負担を極力軽減しつつ、共通課題に対する戦術を再度固め、優先順位をつけていくのである。その議論の取っかかりとしては、これまでのエコツーリズム戦略の中で実現が必要であるにもかかわらず、制約があり実現できていない課題を扱うのが良い。これらであれば一から考える必要がなく、「何とかしなければ」というモチベーションも働くため、まな板に乗せやすく具体的な題材としても適している。運営面の課題としては、誰かが既存の部会のあり方をコーディネートし、次年度以降に何らかのアクションを起こす必要がある。そうしなければ、松田委員が言われた「具体的な戦術」には繋がらないだろう。まずは「やればできる」という成功事例を作り、会議の構成員に示すことができれば、「我々もうまく調整してやってみよう」という全体のモチベーション向上にも繋がるはずである。うまくいくかは未知数だが、一つの考えとして提案したい。

松田：間野委員に整理していただいた通りである。また、船木委員が言及したエコツーリズムガイドラインをもとに戦術を考えるというアプローチは確かにその通りだが、現状ではベースとなるエコツーリズムガイドライン自体が存在していないのが事実である。逆に言えば、エコツーリズム戦略とガイドラインのようなものがしっかりと整備されていれば、それを基盤にできるため、頻繁に会議を開く必要もなくなるだろう。具体的な課題を挙げると、知床五湖に関しては、利用調整地区となっているため、ヒグマの問題などを議論する場が用意されている。しかし、ヒグマの目撃頻度が五湖とそう変わらないフレペの滝遊歩道については、いざ問題が生じた際に議論する場が存在しない。現在、こうした現場の課題を吸い上げる場所がない状態である。これは、ガイド側から「こういう利用にしよう」と持ちかけるような提案で解決すべきものとも少し性質が異なる。こうした課題を議論する場をどのように作り、整理すべきか明確な答えを持っているわけではないが、既存の枠組みでは拾いきれない、実際に議論しなければならない課題がいくつも存在しているという事実を、まずは皆様に認識していただきたい。

愛甲：今の話を踏まえると、提案制度では事業を実施する際にのみではなく、議論の場を設けるための提案があっても良いのではないだろうか。例えば、「この課題を扱っ

てほしい」「フレペの滝の課題について議論したい」といった、議論の提起自体を目的とした提案があっても良いと思う。

石川：皆様の話を聞いていると、様々なレベルの課題や関心を持つ人々が各部会に散らばっており、個別議論では共通理解に達しない状況にある。そのため、名称や形式はともかく、全体を横断して話し合える「課題検討部会」のような場が求められていると感じる。エコツーリズム戦略の見直しにおいて、先ほど松田委員が指摘したような「具体的な戦術まで詰めるべき項目」が出た際には、会議の構成や位置付けを細かく考える前に、まずは関係者で1日集まって試行的に話し合ってみてはどうか。実際に議論を動かしながら今後の進め方を探っていく方が、結果としてあるべき枠組みの形も見えてくるという印象を持った。

石黒：ここまでの議論を聞いていて、思うことが2点ある。一つは、今までになかった新しい会議の枠組みが必要だという意見も十分に理解できるが、安易にそれを作ってしまうと、数年後にまた組織の組み直しが必要になったり、様々なレベルの会議が増えすぎて目的が見失われたりする懸念がある。私としては、先ほど愛甲座長が話されたように検討会議の中で議題として扱う方が望ましいのではないかと。検討会議は枠組みが大きすぎるという懸念はあるかもしれないが、会議体を新しく広げるよりも、既存の場を含める方向に力学を働かせた方が、結果的に今後の横断的な検討もしやすくなると思う。

もう一つは、IP全体計画作成時からの課題でもあるが、松田委員が言及された民間のビジネスで行う事業と、私たちが今議論している政策上の方策は、似て非なるものである。シャトルバスの運行など、個別の事業者では解決できず行政の介入が必要なものや、複数事業にまたがる課題については、当然ここで方策として議論し記載すべきである。しかし、具体的なビジネスの展開は、事業者が収益性と持続性を考慮し、自由な発想で行うべきであり、それこそが提案制度の根幹である。そこまで踏み込みすぎると、すべてががんにがらめになり、かえって提案が出づらくなってしまふ。行政が介入すべき横断的な課題はここで議論し、個別のビジネススペースの方策については、できるだけ提案制度で提示してもらい形に整理する発想が必要である。

愛甲：話しがよく整理され、状況が明確になった。新たな部会的なものが必要だという意見もあれば、石黒委員が指摘したように検討会議の中に組み込むべきだという意見もあった。現在、エコツーリズム戦略の改定を進めながら、エコツーリズムWGと検討会議の関係性についても前回検討を行ったが、依然として試行錯誤しながら進めている状況である。今回の検討会議では、次第の冒頭でモニタリング結果を報告

することで、参加者から率直な意見を出してもらうことで、現場が抱えている課題感を共有したいと考えている。そうした取り組みも進めつつ、エコツーリズム戦略の改定の中で、どのような枠組みにしていくかを、本日いただいた意見を踏まえて引き続き検討をお願いしたい。

本日の意見をもとに、素案ができた段階でなるべく早めにエコツーリズム WG 委員と調整を行っていただきたい。また、この後の検討会議を通じて地域からどのような意見が出るかも含めて、整理をお願いする。

続いて、次の議題に移る。(4) 羅臼岳ヒグマ人身事故を踏まえた検証と対策の方向性について、説明をお願いする。本件は、12月24日に実施した「羅臼岳におけるヒグマによる人身事故検証会議」の段階で原案が提示しており、ヒグマ WG でも既に扱われている内容である。そのため、原案から変更された点や、エコツーリズム WG に直接関係する部分を中心に説明をお願いする。

(4) 羅臼岳ヒグマ人身事故を踏まえた検証と対策の方向性について

資料 4-1 事故検証の結果と再発防止策の概要(案)

資料 4-2 ヒグマ生息地における登山の行動規範の策定と登山利用者への情報提供

資料 4-3 登山道におけるヒグマによる危険事案発生時の対応の見直し

資料 4-4 個体管理の強化(問題個体の特定と捕獲強化)

…環境省・岡野が説明

愛甲：本件については午後の検討会議でも議論する予定だが、WGとして専門的な立場からコメント願う。松田委員、お願いする。

松田：限られた人員と予算の中での情報提供は難しいと考えるため、ルールを明確に定めていくべきではないか。例えば、今後トレイルランニングを禁止する見込みはないか、といった点が気にかかっている。登山中に走っていることが事故の要因になる可能性も考えられる。

岡野：今回の事故については目撃者がおらず、被害者が走っていたかどうかは不明である。しかしながら、ヒグマとの遭遇リスクは単独行動や移動速度が速い場合に高まると言われている。また、ヒグマには逃げるものを追いかける習性があることを踏まえれば、やはりそのような行為は避けるべきである。ヒグマとの突然の遭遇を避けるため、走ることや日没後などの暗い時間帯の行動を避けるといった点を整理し、Web ページで発信していきたい。

愛甲：先端部地区の利用の心得について、先ほどエコツーリズム戦略との関係も整理されていたが、その辺りも見直しや追記が必要になると考える。

岡野：今回はまず利用の心得を整理し、分かりやすく伝えるために Web サイトを構築する予定である。その中で、最近のヒグマの出没状況等も踏まえ、追加すべき内容があれば確実に盛り込んでいきたい。

愛甲：他に意見はないか。この件については検討会議でも発言願う。続いて（５）その他の議題に移る。資料 5-1「知床沼の野営指定地のモニタリング経過について」葉山氏から説明願う。

（５） その他

資料 5-1 知床沼野営指定地のモニタリング経過について

…環境省・葉山が説明

資料 5-1 （別添）第 2 回エゾシカ WG 資料

…石川委員が説明

愛甲：説明、感謝する。資料 5-1 知床沼野営指定地の問題に関しては、今回は情報共有としてまとめと報告をいただいた。この件は、2012 年 2013 年に羅臼山岳会から提案があり野営禁止を一部解除したものである。その後提案者である羅臼山岳会がずっと継続してモニタリングを行っているからこそ、今回のような評価ができるともいえる。今後も継続して注視していきたい。

資料 5-2 知床世界自然遺産登録 20 周年事業「世界遺産と地域」企画の進捗

…知床財団・村田が説明

愛甲：科学委員会で配布された冊子はすでに各 WG の委員全員に行き渡っているか。

秋葉：先日の科学委員会の際には配布したが、それ以外の場では配布していない。そのため、全員には行き渡っていない。

愛甲：まずはその冊子を共有してほしい。特にエコツーリズムの箇所については、私が個人的な思いも含めて執筆している。一読し、各自執筆の参考にさせていただきたい。最後に、全体を通して意見があれば伺いたいが、よろしいか。それでは、これにて適正利用・エコツーリズム WG を終了とする。

葉山：皆様の活発な議論に感謝申し上げます。午後の適正利用・エコツアーリズム検討会議も引き続きよろしく願います。

(閉会)